

水野雄司著

『村岡典嗣——日本精神文化の真義を闡明せむ』

(ミネルヴァ書房・二〇一八年)

本村 昌文

「日本思想史学」とは何か？

こうした問いかけをするとき、「日本思想史学」の先学のひとりととして挙げられるのが、村岡典嗣（一八八四—一九四六）である。しかし、一般に「村岡典嗣」という名前を（その読み方も含めて）知っている人は決して多くない。評者が勤務する大学で日本思想史関係の講義を行う際に「村岡典嗣という人を知っていますか」と尋ねて、手が挙がることはほとんどない。

しかし、一九九〇年代以降、村岡典嗣の研究は断続的に行われ、彼の思想の全体像が少しずつ明らかにされ、新たな史料の紹介もなされてきた。本書はそうした研究動向において、著書としてまとめられたはじめての評伝である。

本書の構成は、以下の通りである。

はしがき

第一章 精神的故郷

1 父と生い立ち／2 開成尋常中学校での学び

第二章 早稲田大学入学と波多野精一

1 明治期の大学制度と早稲田大学創立／2 波多野精一とキリスト教／3 結婚、そして就職

第三章 『本居宣長』

1 本居宣長を選んだ理由／2 宣長問題とは何か／3 『本居宣長』の後

第四章 「早稲田騒動」と学問的精神

1 「早稲田騒動」とは／2 波多野精一から受け継いだ学問的精神

第五章 東北帝国大学における日本思想史

1 欧州留学／2 東北帝国大学着任と山田孝雄／3 明治以降の「日本思想」／4 平田篤胤とキリスト教／5 時運としての「日本精神」／6 「日本思想」について／7 チェンバレンと国体思想

終章 学問の永遠の相

主要参考文献／あとがき／村岡典嗣略年譜／事項索引／人名索引

各章のタイトルからわかるように、生い立ち、早稲田大学において受けた学問的影響、現在でも読み継がれる『本居宣長』、東北帝国大学における研究と人的交流などにスポットを当て、「国民国家」論への警鐘をも鳴らす、村岡典嗣の「日本

思想史」とは何なのか。生涯と思想を繙くことで、この問いの答えに辿り着くことが、本書の目的」とされている（「はしがき」）。以下、まず本書の内容を紹介したい。

二

第一章では、村岡典嗣の父と家庭環境、幼少期から開成尋常中学校での学業や人的交流が述べられている。村岡の父・典安（一八四九〜？）は山家藩の槍術師範家の長男として生まれ、オランダ式操練、フランス式練兵法も学び、明治維新後、陸軍士官学校への入学を志していた。しかし、子どもの頃の怪我がもとで士官学校への入学を断念し、叔父が営んでいた牧牛業に倣って事業をはじめ、明治十七年（一八八四）に「東京練乳会社」を設立した。この翌年、村岡は誕生するが、父の事業は失敗に終わり、村岡の家庭は金銭的に苦しい状況が続くことになった。こうした家庭環境と相俟って、村岡は歌人・国文学者の佐佐木弘綱（一八二八〜一八九一）のところに寄宿する。弘綱は本居宣長の長男・春庭に学び、佐佐木家では和歌、日本の古典、国学などにふれる環境にあった。また弘綱の子・信綱が結成した「竹泊会」（短歌結社）での活動、生涯の友となる吹田順助との交流（「桂陰会」という学術サークルの設立）など、開成尋常中学校での生活に言及する。

第二章では、早稲田大学への入学から就職までの人的交流や問題関心に光が照射される。開成中学校時代の友人の多くが第

一高等学校へ進学するなか、村岡は東京高等学校専門予科（明治三十四年・一九〇一）に入学を経て、明治三十五年（一九〇二）に早稲田大学へ入学する。この早稲田大学への入学を村岡にとって大きな出来事と著者は捉え、「大学」とは何か、「学問」とはどうあるべきか、ということをも、一生をかけて究明すべき課題として村岡に突きつけたのが、この早稲田の地」と指摘する。そして、早稲田大学の設立までの経緯をたどり、「あらゆる勢力から離れて学問が独立」していることを目指す早稲田大学という場に、「戦時中において、感情的な国粹主義の主張には流されず、日本思想史という学問の矜持を胸に、一切の迎合的な発言を慎み、常に真理に忠実な学者として批判的態度を貫いた村岡の原点は、ここにあるかもしれない」と、村岡の学問的態度の原点があつたと捉える。また、村岡の学問に大きな影響を与えた波多野精一との関係に注目し、村岡が西洋哲学を専攻する波多野に師事したのは、「万葉時代の国民感情」と「ギリシア人の感情」との類似に心打たれたゆえ」と指摘する。さらに、早稲田大学卒業後、キリスト教神学校への入学、結婚、就職（日独郵報社）にふれ、『本居宣長』刊行前夜までを追っている。

第三章では、村岡の代表的著作である『本居宣長』に焦点が当てられる。ここで著者は、①「なぜ、本居宣長なのか」、②「なぜ、西洋哲学（ギリシア哲学、キリスト教）ではないのか」、③「なぜ、研究者の道を選んだのか」と、村岡の学問・研究を

考える上で根本的な問いを発する。①について、開成中学校時代師・堀江英雄の言（『本居宣長全集』といふものが出たが、あれをすっかり読んで研究した人はまだいないやうだと言はれた」とともに、村岡が早稲田大学在学中に熱心にシェークスピアの講義を聴講した坪内逍遙の宣長論（『小説神髓』）にも注目する。②について、西洋哲学、とくにギリシア哲学を研究するために必要な語学のレベルに達していないという自己評価と波多野精一から西洋哲学ではなく「新しい領域を開拓するように」と勧められた点に言及する。③について、「村岡において学問こそが、生きる支え（『俗中の真』）であつたのだからと指摘」する新保祐司の所論を導きの糸とし、村岡の純粹な学問への思いが集約されたのが『本居宣長』であつたと述べる。さらに、『本居宣長』で駆使された「文献学」に注目し、芳賀矢一、アウグスト・ベックとの関係に言及し、「学問と信仰の狭間で揺れ動きながら、「純粹な philosophia（愛智、真理の熱愛）」を目指してもがき続ける本居宣長の姿は、鏡写しの村岡自身だったのでないか」と指摘する。

第四章では、大正六年（一九一七）に起きた「早稲田騒動」と村岡との関係について述べている。「早稲田騒動」とは、大正五年（一九一六）、大隈重信夫人の銅像を校庭に建立するという方針が決定されたことを起因として、大学の組織改革、当時の学長・天野為之の不信任声名の提出、高田早苗の学長復帰運動へ展開した一連の事件を指す。当時、早稲田大学内は、天

野学長を支持する「守旧派」と高田の学長復帰を望む「刷新派」に二分され、騒動は「早稲田関係代議士、維持員、評議員、校友、教職員、学生を巻き込む大騒動に発展」することとなった。村岡は「刷新派」のなかでこの騒動に深く関わり、最終的には早稲田大学の職を辞することになる。この騒動の渦中で村岡を支えていたのが、大学を「真理討究」の場と捉える学問的精神であつたことを明らかにしている。

第五章では、広島高等師範学校への着任、欧州留学を経て、東北帝国大学法文学部へ着任し、日本思想史の研究と教育に従事した時期について述べている。着任当時の人的交流（山田孝雄、「国学談話会」、「芭蕉俳諧研究会」など）に言及しつつ、明治以降の「日本思想」の研究の展開、大正末期から流行しはじめる「日本精神」論の動向をもふまえ、村岡の日本思想史の研究手法、学問的態度、日本思想史学会の設立、『本居宣長全集』の刊行などを検討し、「困窮の中でも「俗中の真」として学問を続け、「大学の本質は真理に討究にある」という信念」を堅持した姿を明らかにしている。

終章では、大戦が終結した後、昭和二十年（一九四五）九月に行つた講演、秋田の知人宅でまとめた最後の仕事である平田篤胤研究、そして村岡の「死」から再評価の動きにふれ、「学問のために身をささげた努力家」（佐佐木信綱）の晩年の姿と現在に及ぶ影響について述べている。

本書で明らかにされた村岡典嗣の生涯は、サブタイトルにあるように、時流に流されることなく「日本精神文化の真義を闡明せむ」と格闘した軌跡であろう。幼少時からの度重なる経済的苦難、多忙を極める「日独郵報社」在職中に『本居宣長』を刊行、「早稲田騒動」で職を辞するに至る経緯、時流に乗じて流行する「日本精神」論との対峙など、彼の人生の節目において、著者は「俗中の真」、「真理の探究」、「学問の永遠の相」などの言を引用しつつ、その一貫した学問的態度を描き出している。これまでの研究において、以上のような村岡の姿はしばしば指摘されてきたことではあるが、あらためて彼の生涯にわたって検討したところに、本書の意義を認めることができる。

また、早稲田大学という学問的環境や学術的な雰囲気注目し、それと村岡の学問的態度との関わりを検討したところは（第二章、第四章）、従来の研究では必ずしもクローズアップされてこなかった重要な論点であろう。さらに、第五章における同時代のなかでの「日本精神」論の展開をふまえた村岡の研究および学問的態度の考察などは、村岡の学問や研究をより広い角度から位置づける作業として重要な意味をもつと考えられる。他方、評者にはやや物足りなく感じる部分もある。第一は、本書の「評伝」に関する点である。本書全体を通して昭和十年（一九三五）頃までについては様々な資料を駆使し、生活環境、

人的交流、学問的態度などが論じられるのに対し、昭和十年以降、敗戦後の講演に至るまでは、本書第五章において、「村岡の戦中は、「国体」講座のほかは、もっぱら自身が編集・校訂をした『本居宣長全集』の刊行に費やされた」と指摘されるにとどまり、ほとんど言及がなされていない点である。六十一年と七ヶ月ほどの村岡の人生において、昭和十年以降は全人生の六分の一ほどであり、本章の章構成としても第五章の一部分に相当する程度のことかもしれない。しかし、次第に戦争が激化し、彼の所属する東北帝国大学が否応なく戦時体制に取り込まれていく昭和十年以降、敗戦に至るまでの学問的環境、人的交流などの事績をたどりながら、村岡の研究や論考を検討することによって、時流に迎合しない彼の学問的態度をより鮮明に描くことができたのではないだろうか。

もちろん紙幅の都合もあり、村岡の生涯のすべてにわたって詳細に言及することは難しいであろう。しかし、著者が巻末の「主要参考文献」において、「この調査・研究がなければ本書の作成は不可能であった」と高く評価する池上隆史氏の年譜研究が、村岡の誕生から大正十年（『日本思想史研究』三四号・三五号・三七号・三八号、二〇〇二～〇五年）、大正十三年～昭和九年の日本思想史学会の設立までしか公表されていない（『年報日本思想史』二・三、二〇〇三年、二〇〇四年）という現状、そして本書の第四章までの村岡の事績の多くが池上氏の年譜研究と共通していることを鑑みたとき、昭和十年以降、敗戦に至るま

での時期の村岡の事績を明らかにすることは、研究史上、きわめて意義のある作業になったはずであり、また本書の価値をいっそう際立たせることになったのではなからうか。

第二は、村岡の学問や研究の内容に関する点である。それは、村岡の日本思想史研究の基盤となる西洋哲学理解に関する考察である。第五章中でチェンバレンと村岡の関係について言及しつつ、「村岡もまた『二本足の学者』であった。西洋哲学やキリスト教への知識を豊富に有しながら、学問としての『日本思想史』に立ち向かうその姿勢は、『東西両洋の文化を、一本書、の足で踏まへて立つてゐる学者』（森鷗外「鼎軒先生」）そのものである」という指摘をみると、その思いがいっそう強まることを禁じ得ない。本書で言及される村岡の西洋哲学理解については、波多野精一の学問との関係、アウグスト・ベックの文献学との関係という従来の研究の域を脱していない。例えば、すでに原田隆吉氏が指摘し（『村岡典嗣』、永原慶二・鹿野政直編『日本の歴史家』日本評論社、一九七六年）、前田勉氏が村岡の「日本思想史の通史の叙述の平板さ・単調さの要因」（『解説——日本思想史学の生誕』、『新編日本思想史研究 村岡典嗣論文選』平凡社、二〇〇四年）として指摘した新カント派の思想と村岡との関係は、村岡の研究や学問を考える上で欠くことができない作業ではなからうか（本書刊行後であるが、この問題については、高橋嶺雄氏の新しい論考もあり（『村岡典嗣と日本思想史学』、中野目徹編『近代日本の思想をさぐる——研究のための15の視角』吉川弘

文館、二〇一八年）、今後の村岡研究の論点のひとつになると考えられることも付記しておきたい）。

また、村岡の西洋哲学理解に関連して、東北大学史料館所蔵の「村岡典嗣文書」には、明治四十一年（一九〇八）、大正五年（一九一六）頃に作成したギリシア哲学関係の資料が残されている。その中心はヘラクレイトスの思想であり、主な資料は村岡が立ち上げた哲学研究会の第十一回例会（大正六年一月）における発表の草稿である。大正六年頃、一方で、村岡は「早稲田騒動」の渦中におり、大学の組織改革の素案を作成しつつ、他方ではヘラクレイトスなどの古代ギリシア哲学の研究に励んでいた。こうしたヘラクレイトスの思想への関心は、後に村岡が「日本精神」論の流行と対峙しつつ構想した「国体」と「世界文化の摂取」との関係の考察や、徂徠学と宣長学との関係を検討した論考にも影響を及ぼしており（『日本精神論』一九四三年、「徂徠学と宣長学との関係」一九四五年など）、村岡の研究対象を捉える視座として注意する必要がある。こうした未公開の資料の存在について、著者は調査済みであろし、限られた紙数で網羅的に言及することは難しいであろう。しかし、村岡の学問・研究Ⅱ文献学と捉え、その文献学との関わりでドイツ文献学との関連を検討する、また波多野精一との関係で西洋哲学理解を捉えるという従来の研究史上の論点をこえていくためには、そもそも村岡はどのような西洋哲学関係の書を読んでいたのか、それらの何が村岡の日本思想史研究の基盤を形成したの

か、そして村岡の学問的営みは当時の西洋哲学関係書の受容の流れのなかでどのように理解できるのかという作業の積み重ねが必要不可欠である。そして、こうした作業の積み重ねを通して、近代日本思想史の展開に村岡を位置づけるための新たな地平がみえてくるのではないだろうか。

以上、評者なりの所感を述べたが、「評伝」研究という制約のなか、どこまで以上の点を反映させることができるのか、ないものねだりを述べているとも感じる。もとより評者は近代日本思想史を専門としているわけではなく、断片的に村岡典嗣の研究を行ってきたに過ぎない。近代日本の思想の展開についての素養も乏しく、多くの誤読や曲解もあるうし、正鵠を得た評価ができていくか心許ない。しかし、著者が「あとがき」において、「この本が誘い水になることで、第二、第三の評伝や、より豊かな研究が世に出ることが筆者の願いであり、それを切に願う者である」と述べている一文をみると、微力ながら村岡研究に従事してきた一研究者として、本書を「誘い水」として何かしらの応答をする必要性を実感している。ある人物の「評伝」の研究を通して、いかにその人物の思想の新たな側面を提示することができるのかという点に思いをめぐらし、また今後の村岡研究の進むべき道について数多くの示唆を得ることができた一冊である。

(岡山大学教授)

中野目徹編

『近代日本の思想をさぐる ——研究のための15の視角』

(吉川弘文館・二〇一八年)

松田 宏一郎

「思想史」を英語で言うところの Intellectual History (ちなみに日本思想史学会はこれを採用している) なのか、History of Ideas なのか、History of (通常いって) Japanese とか Political とった限定の言葉が入る) Thought なのか、厳密な限定は不可能で、実際には個々の研究者が好みに応じて何となく手法と対象を選んできた。したがって、複数の執筆者による本でも「思想史」の定義ははっきりしないのが普通である。しかし本書の場合は、研究対象を、統括された意図を表現する作品としてではなく、「史料」として扱うべきことを一貫して主張し、多くの成果を挙げてきた編者のもとに、若手・中堅研究者がそれぞれの研究関心に即しながらも、方法論を共有することで成立したという点で方法意識が極めて明確な珍しいものである。本書の副題は「二五の視角」とあるが、「視角」が一五あるのではなく、視角はあるいは地平は共有しつつ、トピックが一五あるというのが